

# 同窓生が語る宮澤賢治

## 小野寺伊勢之助教授と宮澤賢治（7）

若尾紀夫（C昭39・院41）

### 問題の提起

及川四郎宛葉書（昭和7年2月）（書簡408a）

盛岡市茅町角 及川四郎様  
花巻町 宮沢賢治

ご無沙汰いたしました。昨年末から疾みやっと起きて居ります。ご肥料の教科書ありがたうございました。写真明瞭なこと驚くばかりです。近日中に亦申しあげます。

昭和7年の春、前年から病臥していたがやっと良くなった賢治は、及川四郎から肥料の教科書を受け取った。この手紙はそれに対する賢治のお礼であり、またその中の写真が驚くばかりきれいに撮れていると感想を述べている。資料（新校本 宮澤賢治全集第15巻）によると「昭和42年筑摩書房版全集には“この葉書は発送されなかった”と注記されているので、本書簡はあるいは下書きであったかもしれない。」とある。投函の有無はともかく、賢治がこのような趣旨の手紙を書いたことは事実であろう。

それでは「ご肥料の教科書」とはなにか。なぜ「及川四郎」がそれを送ったのか。また「写真」とは具体的に何を指すのか。資料では手紙の日付は「春から初夏」ないしは「昭和7年2月」となっているが、手紙が書かれた正確な日付はいつ頃なのか。色々の疑問が湧いてくる。

鈴木東蔵宛封書（昭和7年3月13日）（書簡409）

拝啓 要件左記仕候

一、二、三、五（省略）

四、小野寺博士肥料学教科書へ工場の写真一頁入りしもの出来致し参り候

三月十三日

敬具

鈴木藤三様

賢治が東北砕石工場主鈴木東蔵に宛てた昭和7年3月13日の手紙（第4項）に、「小野寺博士の肥料

学教科書へ工場の写真一頁が入ったものが出来ました。」とある。このことから、その本は盛岡高農の小野寺伊勢之助教授が書いた肥料学教科書であり、写真は東北砕石工場に関連するものであることが分かる。そこで、小野寺伊勢之助・宮澤賢治・及川四郎（光原社）・肥料学教科書・石灰石（炭酸石灰）・工場の写真をキーワードとして、この手紙にまつわる疑問について考察した。

### 賢治と炭酸石灰と東北砕石工場

賢治は盛岡高等農林学校農学科第2部（後の農芸化学科）に大正4年から大正9年まで在籍したが、その間最も大きな影響を受けたのは地質及土壌学教室の恩師豊田太郎教授（明治38年～大正9年）であることはよく知られている。関教授は火山灰土壌に関する研究を行い、生産性の低い不良土壌である酸性火山灰土壌の改良に石灰石（炭酸石灰・炭酸カルシウム）の施用を提唱している。

北上川流域には酸性の洪積土壌が広く分布していることは、当時すでに知られており、賢治も石灰石を用いた酸性土壌の改良に強い関心を持っていた。このことは多くの資料が示しているが、花巻農学校教師時代（大正10年～大正15年）の北海道修学旅行復命書（大正13年5月18日～23日）からもうかがえる。「北海道石灰会社石灰岩抹を販るあり。これ酸性土壌地改良唯一の物なり。米国之を用ふる既に年あり。内地未だ之を製せず。早くかの北上山地の一角を砕き来りて我が荒涼たる洪積不良土に施与し草地に自らなるクローバーとチモシイとの波をつくり耕地に油々漸々たる禾穀を成ぜん。」羅須地人協会時代（大正15年～昭和3年）には、農業・稲作の指導や肥料設計などを精力的に行い、酸性土壌の改良に石灰岩抹の施用を奨励した。

賢治と東北砕石工場主鈴木東蔵との最初の出会いは昭和4年春で、東蔵が花巻を訪れて賢治に面会を申し入れ石灰石粉について相談したと言われる。こ

のように石灰石に関心を持っていた賢治は、東蔵と昭和4年10月から広告文案にかかわる書簡のやりとりを行い、同年12月12日には、東蔵より広告文「石灰石粉の効果」が賢治のもとに送られてくる。昭和5年1月には、賢治は「貴工場に対する献策」を書き、「石灰石粉」の名称を「肥料用炭酸石灰」に改めるよう提言するなど、次第に東北砕石工場の事業に関わるようになる。

## 広告「肥料用炭酸石灰に就て」と掲載写真

鈴木東蔵は、昭和5年4月12日に花巻の賢治宅を訪れ、広告執筆のお礼かたがた石灰石を原料にした新しい合成肥料の調製について相談をしている（書簡262）。その後、東蔵は自分で書いた広告文を賢治に送ったが、賢治はそれを全面的に起草し直して東蔵に送り返した（昭和5年4月19日）。東蔵はその原稿をもとに広告を完成して賢治に送り届けた。これが広告第1版「肥料用炭酸石灰に就て」に相当するものである。

それに対して賢治は「ご送附の広告類拝見いたしました。いずれも申し分ないと思ひます。」との返事（書簡268・昭和5年6月30日）を東蔵に書き、さらに「次回には裏面の表類多少整理し諸権威者の著述から抜粋を加えたいと思ひますがそれは今冬のことにはいたしませう。」と既に第2版の草稿について言及している。広告「肥料用炭酸石灰に就て」は最終的には第5版まで改訂発行されたが、問題の写真に関係する第1版から第3版の発行日とタイトルは以下ようになる。

- ・第1版（昭和5年6月20日頃）新聞紙型  
タイトル「御存じですか新肥料 炭酸石灰 他  
の及ばぬ甚大なる効力」
- ・第2版（昭和6年3月10日頃）新聞紙型  
タイトル「御存じですか新肥料 肥料用炭酸石  
灰に就て 他及ばぬ適切なる効力」
- ・第3版（昭和7年3月20日頃）新聞紙型  
タイトル「肥料用炭酸石灰に就て」

広告に掲載されている写真に注目すると、第1版の写真は「採石場」で、そこにはまだ賢治の姿はみられない。第2版の写真は、賢治が陸中松川の東北砕石工場を訪問した時に撮影したもので、行員たちが石灰岩を採掘している作業現場で賢治と東蔵が写っている（「肥料学教科書」に掲載の写真）。これと同じ写真は第3版にも掲載されている。それでは、広告第2版の「賢治と東蔵が入った写真」はいつ頃撮影されたものか。

賢治は昭和6年2月21日付けで正式に東北砕石工

場技師嘱託の契約を結んだが、この時から昭和8年9月21日（死去）までが東北砕石工場技師時代に相当する。鈴木 實（東蔵の長男）（「宮澤賢治と東山」）によると、賢治は就任後の昭和6年3月26日に東北砕石工場を訪れ東蔵や行員たちと採石場で記念写真を撮ったと言われる。ところが、賢治はそれ以前、また以降にも東北砕石工場を訪れている。書簡や手帳などの資料から、訪問回数は9回（①～⑨）と考えられる。

賢治と東蔵や行員たちが採石場で撮った写真、採石場で行員たちと横並び二列（14名）で撮った写真、東北砕石工場の外観の写真（工場・事務所・大船渡線・トロッコ）が存在する。それらは技師となった賢治が採石作業を視察した時の記念写真（昭和6年春）と言われる。それではその撮影日はいつなのか。

昭和4年春以降、賢治は鈴木東蔵と頻りに書簡のやり取りを行い、広告第1版「肥料用炭酸石灰に就て」（昭和5年6月20日頃）を発行した。当時病気がちであった賢治は、健康が回復するのを待って、昭和5年9月13日①に初めて東北砕石工場を訪問したが、その時は運悪く東蔵が留守であったため、鈴木貞治（東蔵の叔父貞三郎の弟）が賢治を接待し工場内を案内した（書簡274）。従って、この時には賢治と東蔵の両人が写った写真はあり得ない。

東北砕石工場技師（昭和6年2月21日）となった賢治は、就任早々の2月24日②に陸中松川の工場を訪ね、契約金500円を引き渡し東蔵から旅費100円を受け取った。広告第2版（昭和6年3月10日頃）に掲載された採石場の写真は、その時に撮影した可能性が大きい。

賢治は、昭和6年3月2日に盛岡の県庁へ行き、広告発送先名簿作成のため県内実行組合名簿の約1,000名を写し取り花巻へ戻り書状袋書き始め、昭和6年3月12日には刷り上がった東北砕石工場の広告第2版1,400通の県内発送を終了した（書簡306）。

昭和6年3月26日③、賢治は東北砕石工場を訪問したが、この時は工場では土台のコンクリート打ちをしていたと言う。この日に採石場で写真撮影した可能性は勿論否定出来ないが、「行員たちが土台のコンクリート打ちをしていた」とすると採石場における石灰岩の砕石作業の写真撮影は考えにくい。

昭和6年3月30日④に東北砕石工場へ行き、昭和6年4月18日⑤には東北砕石工場で打ち合わせをした後、仙台へ行き県庁（関口三郎技師）を訪ねる。昭和6年4月24日⑥、東北砕石工場から相談を受けて松川に行く。昭和6年5月4日⑦、東北砕石工場へ行き、その後仙台（県庁）に足を伸ばす。昭和6年5月8日⑧及び昭和6年6月14日⑨にも東北砕石工場へ出向く。

以上のように、広告第2版の発行日（昭和6年3月10日頃）を考慮すると、賢治が東北砕石工場を訪ねて記念撮影した時期は、その発行日より前、つまり就任直後の昭和6年2月24日と考えられる。恐らく当初は、広告第1版の「採石場」の写真を使用する予定であったが、第2版では「賢治や東蔵、行員たちが写った石灰岩粉碎の状況」の写真に急きょ切り換えたのではないか。

### 小野寺伊勢之助教授と賢治

小野寺伊勢之助教授が母校盛岡高農の講師として赴任したのは、大正14年6月23日のことで、その当時、賢治は花巻農学校に勤めていた（大正10年12月3日～大正15年3月31日）。賢治は盛岡にかなり頻繁に来ているが、小野寺伊勢之助教授をいつ何回訪ねたかは一部資料（書簡352）を除いて明らかではない。また小野寺教授と賢治との間で交わされた書簡の存在も知られていない。従って、両人の最初の出会いや具体的な接触についてはほとんど分かっていない。

賢治は小野寺伊勢之助教授の研究業績に注目し評価していたと考えられる。例えば鈴木東蔵宛手紙（書簡345・昭和6年5月16日）には、「・・過日仙台出張中より専ら稲作に対する石灰追肥に関する資料蒐集罷在多分今明日中に右に対するパンフレット製作の上盛岡の小野寺博士（紫雲英栽培の権威）の御意見を徴し御賛同を得たる上は・・」と、小野寺教授を「紫雲英栽培の権威」としている。広告第3版では冒頭の引用文献が鈴木梅太郎博士のものから小野寺伊勢之助教授のものに差し換えられている。また賢治は小野寺伊勢之助教授の研究論文や著書「肥料学汎論（養賢堂・昭和5年11月5日）」は勿論、その後に出版された専門書も読んでいたであろう。また次回取り上げるが、賢治は小野寺伊勢之助教授の研究室を直接訪ね学生の得業論文として「炭酸石灰の肥効」の研究を依頼していることから、それ以前に小野寺教授と接触があったと考えられる。

小野寺伊勢之助教授も酸性土壌について研究していたので、賢治の活動（炭酸石灰による酸性土壌改良、羅須地人協会時代・東北砕石工場技師時代の働き）について大いに関心を持っていたであろう。このことは、小野寺教授が賢治に依頼された「炭酸石灰の肥効」の研究を快諾した理由であろう。

### 小野寺伊勢之助著「肥料学教科書」と光原社と賢治

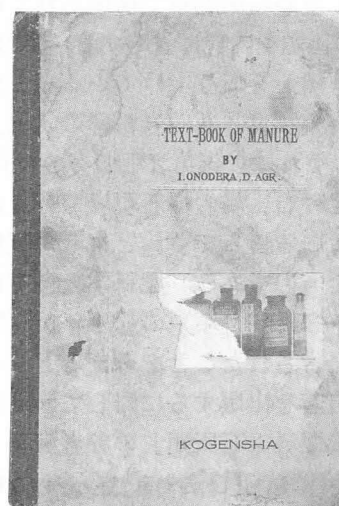
#### 小野寺伊勢之助の著書と光原社

小野寺伊勢之助教授は盛岡高農在職中に多くの著

書を著している。肥料学汎論（昭和5年11月5日）、肥料学各論上（昭和7年2月5日）、肥料学各論下（昭和7年12月5日）、肥料学綱要（昭和16年4月30日）、改著肥料学新編（昭和26年1月20日）。これらは何れも評価の高い専門書で養賢堂から出版されている。この他に、農業学校などの生徒を対象とした教科書4冊を出版している。肥料学教科書（昭和7年2月5日）、土壌学（昭和12年1月10日）、肥料学B型（昭和12年1月10日）、実用土壌肥料学（昭和13年1月25日）で、盛岡の光原社（及川四郎）からの出版である。光原社は賢治と親交のあった及川四郎と近森善一両氏の創業によるが、近森善一の離盛・帰郷後は、及川四郎が光原社を引継ぎ運営していた。出版物全ては把握出来ないが、光原社からは多数の教科書などが出版されている。例えば、病虫害防除便覧（近森善一・大正12年）、蔬菜園芸学教科書（小熊彦三郎・大正13年）、新制作物各論教科書・食用作物篇（大串貞市・小熊彦三郎・大正15年）、花卉園芸学（小熊彦三郎・昭和5年）、女子農業教科書（来栖義一・昭和4年）、栽培汎論A（小野寺二郎・昭和11年）などを含め現在確認できる本は29冊あり、光原社には20冊が所蔵されている。

#### 肥料学教科書（TEXT-BOOK OF MANURE）

小野寺伊勢之助教授は、盛岡赴任後、光原社から上記の教科書を出版したが、その中の肥料学教科書が「書簡408 a 及び409」で賢治が言及している本である。

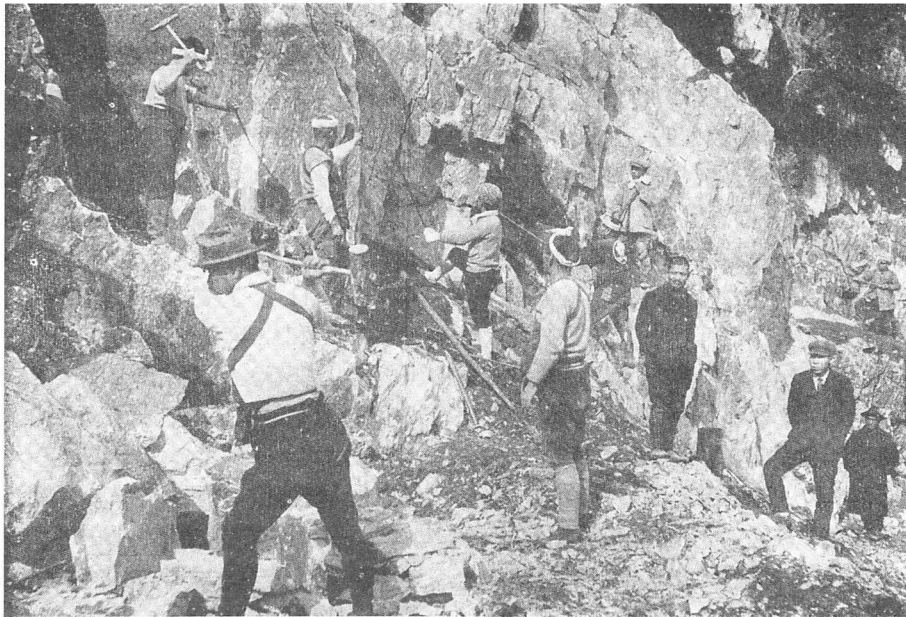


肥料学教科書

第1版は昭和7年2月5日発行

写真は訂正第1版で昭和11年3月3日発行

肥料学教科書は昭和7年2月5日に第1版（発行者：及川四郎、盛岡市茅町33番地）が発行されたが、光原社にもなく「幻の本」となり色々と手を尽くし



東北砕石工場採石場（石灰岩粉碎の状況）の記念写真  
右より2人目賢治、3人目鈴木東蔵

たが入手することが出来なかった。ところが、幸いなことに偶然、古書店で訂正第1版（昭和11年3月3日発行）を発見することが出来た。サイズ22×15cm、160頁で、表紙は全て英語表記で試業版の写真が貼り付けてある。農業学校での肥料の授業を分かりやすくするために多くの写真や図表、実例、附録が挿入されている。因みに光原社から出版された他の本の表紙にも、同じような写真（コスモスや農場など）が貼付されている。

本文は第1章から第28章で構成されているが、ここでは各章の標題や内容は省略する。第19章では「間接肥料：石灰類」を取り上げている。この章に問題となる採石場の写真「石灰岩粉碎の状況」が掲載されているが、それは広告第2版のものと同一である。写真は、東北砕石工場の採石現場で行員たちが石灰岩を採掘している傍らで賢治と東蔵が視察している様子を写したものである。肥料学教科書は広告第2版（昭和6年3月10日頃）の約1年後（昭和7年2月5日）に発行されたことを考えると、小野寺伊勢之助教授は自著を出版するに際して、広告第2版の写真を「間接肥料：石灰類」の参考資料として掲載するため賢治に依頼し送ってもらったものであろう。小野寺教授と賢治の間で交わされた書簡はないが、賢治は頻りに盛岡に向向き、少なくとも昭和6年5月16日（書簡345）及び同年5月30日（書簡352）には盛岡高農を訪ね小野寺教授と面会しているので、賢治に直接写真を依頼する機会はあったと推察される。

出版元である光原社の及川四郎は、発行（昭和7

年2月5日）された肥料学教科書を賢治に贈呈した。及川四郎宛手紙（書簡408a）は、それを受け取った賢治の返礼であるが、その日付はいつ頃か。肥料学教科書の発行（2月5日）後、東蔵に宛てた3月13日付け手紙（書簡409）で「小野寺博士肥料学教科書へ工場の写真一頁入りしもの出来致し参り候」と述べている。ところが、その間に賢治が東蔵に宛てた手紙は4通、書簡405（2月15日）、406（2月17日）、407（2月21日）、408（2月29日）あるが、それらの手紙では肥料学教科書や写真については触れていない。几帳面で筆まめな賢治のこと、盛岡高農の大先輩である小野寺教授の著書を受け取り自分が送った写真を見て、賢治は直ぐに及川四郎にお礼の手紙を書いたのではないか。それを前提にすると、賢治が教科書を受け取り返礼を書いたのは、2月29日以降、3月13日以前と推察される。

#### 肥料学B型 (TEXT-BOOK OF MANURE B)

肥料学B型は、昭和12年1月10日に光原社から出版された（発行者：及川四郎、盛岡市材木町82番地）。光原社所蔵のものは、修正第17版（昭和17年1月15日発行）で、サイズ21×15cm、116頁、表紙は日本語表記である。頁数及び内容（第1項～第18項）から見て、肥料学B型は肥料学教科書（A型に相当するか）の縮小版であり、第17項の「間接肥料：石灰類」には広告第2版と同じ写真が掲載されている。

この教科書は少なくとも第17版まで出版されているので、農業学校などでかなり汎用されていたと考えられる。



肥料学B型（光原社所蔵）  
第1版は昭和12年1月10日発行  
写真は修正第17版で昭和17年1月15日発行

大分長くなったが、及川四郎宛手紙（書簡408 a）について考察した結果は、次のように要約できよう。盛岡高農の小野寺伊勢之助教授は、肥料学教科書を賢治と親交のあった及川四郎が経営する光原社から出版した（昭和7年2月5日）。及川四郎はその教科書を賢治に贈呈し、賢治は及川四郎に返礼を書いたが、その時期は昭和7年2月29日以降、3月13日以前と推測される。賢治が「写真明瞭なこと驚くばかりです。」と書いた写真は、広告第2版「肥料用炭酸石灰に就て」（昭和6年3月10日頃）のものと同一であり、賢治が東北砕石工場技師として松川を訪問した時（昭和6年2月24日）に東蔵や行員たちと採石場で記念撮影したものであろう。

本稿をまとめるに当たり、千葉 明氏（元岩手県立農業試験場長）及び及川隆二氏（光原社専務取締役）には色々とお世話になりました。ここに謝意を表します。

## 参考資料

- ・酸性土壌に関する研究：小野寺伊勢之助著、盛岡高等農林学校校友会報27号（大正4年）
- ・年譜 宮澤賢治伝：堀尾青史著、図書新聞双書（昭和41年）
- ・宮澤賢治と東山：鈴木 實著、熊谷印刷（昭和61年）
- ・年表作家読本 宮沢賢治：山内 修編著、河出書房新社（昭和64年）
- ・年譜 宮澤賢治伝：堀尾青史著、中央文庫（平成3年）
- ・宮澤賢治と東北砕石工場の人々：伊藤良治著、国

文社（平成17年）

- ・小野寺伊勢之助博士の肥料学研究と周辺の人々：千葉 明著、肥料科学29号（平成19年）
- ・今日の賢治先生：佐藤 司著、永代印刷（平成20年）
- ・新校本 宮澤賢治全集 第14巻 雑纂 本文篇：筑摩書房（平成9年）
- ・新校本 宮澤賢治全集 第14巻 雑纂 校異篇：筑摩書房（平成9年）
- ・新校本 宮澤賢治全集 第15巻 書簡 本文編：筑摩書房（平成7年）
- ・新校本 宮澤賢治全集 第15巻 書簡 校異篇：筑摩書房（平成7年）
- ・新校本 宮澤賢治全集 第16巻（下）補遺・伝記資料篇：筑摩書房（平成13年）
- ・新校本 宮澤賢治全集 第16巻（下）補遺・年譜篇：筑摩書房（平成13年）